

唄・三線としまくとうば習得 (1)

石原昌英 (琉球大学)

1 はじめに

筆者の友人・知人のうち9名が唄・三線の実演家・経験者である。そのうち3名がしまくとうばを教えている。また9名のうち6名がいわゆる「海外ウチナーンチュ」で、5名が米国・ハワイ州出身である。また、9名のうち6名が唄・三線の教師免許を有していて、広島県、ハワイ州及びカリフォルニア州で民謡教室を主宰し、日本人や米国人に唄・三線を教えている。ハワイ州ホノルル市の友人とカリフォルニア州サンフランシスコ市の友人はしまくとうばを流暢に話すことができ、筆者との電子メールのやり取りではしまくとうばを使うことも多い¹。彼らは、筆者よりしまくとうば運用能力が高い。

9名のうち一人はしまくとうばを教える際に三線を弾きながら沖縄民謡を歌うことがあるが、その人は「唄・三線があるかぎりウチナーグチが減じるということはない」と筆者に語ったことがある。また、石原(2018)がグループインタビューした若者の一人(当時は高校生)は次のように語っていた。

しまくとうば劇の地謡として参加しているが、民謡の歌詞の意味を理解しないで歌っていたことに気がついた。前は、意味も分からずに民謡を歌っていたが、意味がわかるようになって感情の入れ方や表情が変わった。(p.248)

同氏は民謡の歌詞の意味を理解しないうちから三線と沖縄民謡を習い始め、しまくとうば劇の地謡を務めるほどの能力を有していた。しかし、しまくとうばを学び始めて、歌詞の意味が理解できるようになるとさらに演奏能力が向上したことを実感したのである。上記の9名は唄・三線を習い始めてから、しまくとうば(ウチナーグチ)を学ぶことにも取り組んでいる。歌詞の意味がわからないと正しく歌うことができないというのが主な理由である。歌詞の意味を学ぶうちに語彙的・文法的な知識を習得し、しまくとうばが流暢に話せるようになった者もいる。

筆者は2020年2月に鹿児島県奄美市で開催された「令和元年度 危機的な状況にある言語・方言サミット 奄美大会」の協議「ウタを通して伝わることば」のコーディネーターを務めた(文化庁国語課他、2020)。協議には奄美の若手の唄者が2名、沖縄のベテランの唄者・指導者とスウェーデンのサーミ人のヨーク指導者(と通訳)が参加した。奄美の2名は、

¹ ホノルル在住の4名(沖縄系三世・四世)は御冠船歌舞団というNPOを設立し、ハワイ州各地に沖縄系人を対象としてしまくとうば、唄・三線、琉球舞踊に加え沖縄の旧暦の年中行事(旧盆・旧正月等)の伝統を継承する啓蒙活動を実施している。また、毎年のように希望者を募り「母国沖縄」への学問ツアーを実施している。なお、同ツアーはCOVID-19の日米における感染拡大により2020年は中止された。

日本語が母語で奄美の地域言語(シマユムタ)は第二言語としても習得してはいなかった²。2名とも、奄美の島唄を習い始めた時には、歌詞の意味がわからないままに歌っていたと述べていた。つまり、最初に唄から入り、言語的知識は今現在も習得の途中にあるということである。

英国のロンドンに本部を置き世界中に会員がいる Foundation for Endangered Languages (危機言語財団) が2015年に米国のルイジアナ州ニューオーリンズで開催した第19回大会のテーマは The Music of Endangered Languages (消滅危機言語の音楽) であった。大会報告書には、消滅危機言語の復興に音楽が役立つことを論じた論考が掲載されている。

令和二年度の文化庁委託事業で「唄・三線としまくとうば習得」をテーマに調査を実施したのは、上記のことも含め、唄・三線(島唄)を習うことが、学習者のしまくとうば習得に寄与するのかということに関心があったからである。

2 インタビュー調査

唄・三線を習うことがしまくとうば習得にどのような影響を与えるのかを調べるために、筆者の知り合い2名にインタビューをした。COVID-19の影響がなければ調査協力者の人数を増やして、対面でのインタビューを実施する計画であったが、感染予防のために知り合いの関洋と上間明に協力をお願いした。関は1959年に宮崎県で生まれて、現在は広島県在住である。また、上間は1983年にブラジルのブラジリアで生まれて、現在は沖縄県在住である。インタビューは2020年12月4日(関)と2020年12月7日(上間)にそれぞれ40分程度オンライン(Zoom)で実施した。なお、Zoomインタビューは協力者の承諾を得て録画し、さらにICレコーダーに録音した。

調査協力者には下記の質問をした。

調査協力者への質問

1. 唄・三線をやり始めて何年経ったか。現在どのレベルにあるのか(教師免許を持っているか)
2. 唄・三線を習い始めた理由は何か。
3. 習い始める前にウチナーグチは聞いて理解できたり、話したりすることはできていたか。
4. 沖縄民謡の歌詞の意味は理解できていたか。
5. 歌詞の意味の理解を深めるためにどのようなことをしているのか。
6. ウチナーグチの能力がついてくると歌詞の理解が深まったか。
7. (関へ) 民謡教室を開設しているが、生徒にはウチナーグチの歌詞の意味も教え

² 松本・田畑(2012)では、1950年代以降に奄美語がたどった衰退のプロセスが概観されている。同論考の記述から推察されることは、協議に参加した2名はシマユムタが飛び交っている言語環境で育っていないので、シマユムタを習得する機会はなかったということである。

- ているのか。それによって生徒の歌い方が変わるか。
8. 唄・三線に関連してどのような活動をしているのか。
 9. 唄・三線に関連はしていないが、ウチナーグチに関する活動を行なっているか
(ウチナーグチ講座など)
 10. 唄・三線を習うことは、ウチナーグチの習得に効果があると思うか。

以下に質問への回答とその分析を述べる。なお、回答は文字起こしをしたものではなく、筆者による要約である。

まず、関が三線を習い始めたのは 1995 年である。同年に米国海兵隊員による少女暴行事件があったが、関は米兵による残虐行為が行われた沖縄のために何かをやりたかった。習い始めた時は、沖縄語（しまくとぅば）は全くわからなかった。現在は唄・三線の教師免許を持っていて、広島市内で琉球民謡教室を開設している。上間の祖父母は 1957 年に沖縄系人が数多く住んでいたサンパウロから首都のブラジリアに国内移住した。祖父母は沖縄語を話し、祖父は三線を演奏し沖縄民謡を歌っていた。上間は祖父母が話していた沖縄語と祖父が演奏していた三線に興味があった。祖父の唄・三線がカセットテープに録音されていたので、それを聴きながら独学で唄・三線を習い始めた。上間が小さい頃に亡くなった祖父母は上間に沖縄語で話しかけることはなく、両親（父親が沖縄系）は沖縄語が話せなかったもので、唄・三線を習い始めた時に上間は自分が練習している沖縄民謡の歌詞の意味が全くわからなかった。関・上間ともに唄・三線を習い始めた時に沖縄語が全く分からなかったので、習っている民謡の歌詞の意味を理解していたわけではない。しかし、現在は二名ともに自分が歌う民謡の歌詞の意味は理解している。ここから言えるのは、唄・三線がしまくとぅば学習の入口になるということである。関が述べていたように、習い始める理由はさまざまある。

「民謡ショー・コンサートで民謡を聴いて感動した」「（沖縄出身の）夏川りみが三線を弾いてウチナーグチで歌っている歌を歌いたい」「友達が民謡を歌っているのがカッコよかったので」「生まれ島の民謡を歌いたい」などが理由としてあげられるだろう。何事も興味を持つことから始まるので、どんな理由で習い始めても何の問題もない。

関は、広島県で沖縄民謡のサークルに参加し、そこで沖縄語の知識のある胤森守から沖縄語に関する言語知識を授けられた。関は胤森について次のように述べている。

私は彼が、沖縄民謡を翻訳し、ウチナーグチの全体像を私たちに紹介しようとしてくれることに大いに刺激を受け、彼の主観を排した直訳主義（これは私がそう呼ぶ）、首里語を基準とした発音、訳。とことんまで調べ上げるその熱意と姿勢には私は大きく影響をうけている。

関のブログ『たる一の島唄まじめな研究』『なかゆくい 胤森さんの研究』より

関は胤森から勧められて『沖縄語辞典』（国立国語研究所編、1966 年）を購入し、民謡の歌詞に出てくることばの意味を徹底して調べ、段々と語彙力をつけ、自分が習う民謡の歌詞の意味を理解できるようになった。関はブログ『たる一の島唄まじめな研究』（<https://taru.ti-da.net>）を開設し、自分が調べた島唄の歌詞の意味などの解説を発信している。一例を下に示す。

安波節の解説（抜粋）

一、安波のまはんたや（ハリ）肝すがり所

あはのまはんたや（はり）ちむすがり どうくる

'aha nu mahaNta ya (hari) chimusugari dukuru

○安波の真の崖（絶壁）は心に風にあたって涼むところである

語句・あは 安波村。「あふあ」とも発音する。・まはんた 真の崖。＜ま。真の。
＋ はんた。崖。切り立った崖。絶壁。安波村の清水山（そーじゃやま）の東側が絶壁になっている。その上にかつては毛遊びが盛んに行われた広場がある。「はんた」は「崖」であり「端」という意味があり、崖そのものよりもその上にある場所を示すことが多い。（例）「はんたばる」（「険しい高地の畑」【琉球語辞典】。）・ちむ 心。・すがりどうくる 風に当たって涼むところ。＜すがり＜すがりゆん。「風に当たる【風に当たって涼む】」【琉辞】。＋どうくる＜とうくる。所。

『たる一の島唄まじめな研究』から

さらに関は歌詞の意味は理解できても、歌われている情景が理解できないと何が唄われているのかわからないと、できるだけ機会を見つけて歌詞に出てくる土地を訪れている。上記の安波節の舞台となっている国頭村安波の「まはんた」（真の崖）を訪れ、安波節に唄われている景色を実際に観て、情景を想いのかべ、歌詞の意味がより深く理解できたと述べていた。

上間は、日本語を学んでいたもので、歌詞にある漢字はある程度理解できたが、動詞活用などの知識がなかった。そこで、上間は、ブラジル国内の沖縄系が利用しているソーシャル・メディア・ネットワークに沖縄語のページ（グループ）を作って自分が独学で学んでいる民謡の歌詞の意味を教えてほしいと投稿していた。それに対し、沖縄にルーツを持つ人から「自分のおじいちゃんがこう言っていた」などのコメントがあり、少しずつ歌詞の内容を理解していったようである。また、上間は関も利用した『沖縄語辞典』で単語の意味を調べ、吉屋松金（1999）の『実践うちなあぐち教本』で文法を調べ、独学で沖縄語の知識を深めていった。しかしながら上間は独学で学んだ沖縄語の知識に満足せず、言語運用能力をさらに高めるためには沖縄で学ぶしかないと考えた。上間は、県費留学制度の支援を受け沖縄県内の大学に留学したが、大学生が沖縄語を話せない（話さない）という現実に驚き、落胆したと語った。そこで上間は比嘉光龍が主宰するしまくとうば教室で沖縄語を学び、運用能力を高めていった。

関も上間も、沖縄語辞典や文法書を活用しながら、ほぼ独学で民謡の歌詞の意味の理解を深めた。上間は、唄・三線を習い初めた頃は、歌詞の意味を理解していなくて、録音された祖父の唄を真似していただいだけであつたが、意味が理解できるようになるとより感情（肝）を込めた歌い方ができるようになったと語った。関は、自分が調べたことを沖縄民謡を学んでいる人にも知らせるべくブログで発信している。関によるとこれまでに 400 万件以上のアクセスがあり、かなり活用されているようである。関は、沖縄語に堪能な沖縄人が民謡の歌詞の意味などを解説し、それをインターネットで発信するとかなり効果があると述べてい

た。教師資格を有する実演家が主宰する民謡教室で学ぶ者も多いが、まずは独学で学んでそれから本格的に学ぶために民謡教室にくる者も多いと思われる。また、民謡教室ではパフォーマンスに重点が置かれて、歌詞の意味などが十分に教えられていない場合もあるだろう。そのような場合に、インターネット上に歌詞の意味などの解説があると、学習者の理解がより深まると考える。

関は、広島市内で沖縄民謡教室を開設し、約 50 人の生徒に教えている。生徒の中には沖縄や沖永良部にルーツのある人もいるが、ほとんどが「本土系」である。生徒の年齢は 10 代の高校生から 80 代で、60 代が一番多い。沖縄民謡を教える際には、ブログで解説していることに言及しながら、歌詞の意味を説明している。関は「意味を理解しないと、ちゃんと唄えないよ」と生徒に教え、歌詞の意味を理解することの重要性を説明している。関によると、「唄の上手い人は意味がわからなくても真似をしてちゃんと唄えるが、気持ちが入っていないことがわかる。どういう唄と訊いても答えることができない。そういう唄の上手い人にもちゃんと意味を教えている。」と述べた。さらに、「唄えないというので歌詞の意味を教えると、唄えるようになりましたという生徒もいる。」と述べた。上記の危機言語・方言サミットの協議への沖縄県在住の登壇者は「全く方言の分からない若い人たちには、歌詞を最初に見せて、全部方言を翻訳して、これはどういう意味だよ、これこういう意味だよと、説明して、その上で、その唄の内容を頭の中で描いてもらって、それから三味線を弾かせます。(文化庁国語課他 2020 : 54)」と語っている。沖縄民謡の教師クラスになると歌詞の意味を理解していて、意味を理解しなければ正しく唄えないことも理解している。ここに歌詞の意味を理解することの重要性がある。

さらに言うと、意味を理解することなく歌詞を覚えているだけでは、しまくとうばを習得し、実際の会話で使うことはできない。本稿のテーマは唄・三線がしまくとうば習得にどのような肯定的な影響があるのかということである。「しまくとうば習得」は学習者が覚えたしまくとうばを使えるようになることを想定している。関も上間も自身の学習経験などから、「唄・三線を習うことは、ウチナーグチの習得に効果がある」と力説し、「現状では、多くの人にとってしまくとうばに触れる機会は唄・三線しかない」と語った。地域の公民館などが「しまくとうば講座」を開設している場合もあるが、それに参加できる人の数は多くはない。唄・三線を習いたいと思っている人はさまざまな動機がある。異なる動機で唄・三線を習い始めたとしても、歌詞の意味を理解せずに、覚えるだけでなく、意味を理解して「ちゃんと」唄えるようになりたいと考える人は、しまくとうばを習得する可能性が高いと予測できる。

3 まとめにかえて

第 1 節で述べたように、2015 年に開催された危機言語財団の第 19 回大会は「消滅危機言語の音楽」が大会テーマであった。Do-Re-Mi Breathes Life into Dying Languages (ドレミ [音楽 : 筆者] が死の淵にある言語に生命を吹き込む) というタイトルで基調講演を行なった Zarasky は音楽 (唄) を通して複数の言語を習得したことを語っている。その中にはトルコのイスタンブールで話されていて、消滅の危機に瀕している Ladino (Judeo-Spanish) というス

ペイン語の変種も含まれている³。また、同大会で発表した Antoine (2015)は北米先住民言語で消滅の危機に瀕しているラコタ語とラコタ文化を維持継承していくために昔から歌われている歌を教材として活用すべきであると述べている。Zarasky は、Ladino の語彙も文法も歌を通して学んだと述べている。彼女によると、現代的な用法や語彙が使われた歌を伝統的ではないと非難する者もいるが、伝統的ではない用法や語彙が言語継承には役立つこともあるので、変化を受け入れるべきである。沖縄県では毎年のように沖縄語で作詞された新しい唄が誕生しているがその中には佐渡山豊の「ドゥチュイムニ」、喜納昌吉の「ハイサイおじさん」、夏川りみの「涙そうそう（ウチナーグチバージョン）」のように島唄（民謡）の範疇には入らないような、つまり民謡とは言えないような楽曲で沖縄語で唄われているものもある。しまくとうば習得という観点から考えると、しまくとうばの歌詞であればどのようなジャンルでも「教材」にすることができる。重要なのはしまくとうばの歌詞の意味を理解し、歌詞を覚え、唄えるようになることである。さらには、覚えたしまくとうばを実際の会話でも使えるようになることである。

参考文献

- 石原昌英（2018）「しまくとうば劇の効果について」『平成 29 年度 文化庁委託事業 「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」 報告書』242－253 頁。琉球大学国際沖縄研究所。
- 国立国語研究所編（1966）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局。
- 関洋『たる一の島唄まじめな研究』（<https://taru.ti-da.net>）2021 年 2 月 1 日アクセス。
- 文化庁国語課・鹿児島県文化スポーツ局文化振興課・鹿児島県大島支庁総務企画部総務企画課・奄美市教育委員会文化財課（2020）『令和元年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・奄美大島 報告書』。
- 松本泰丈・田畑千秋（2012）「奄美語の現況から」『言語研究』142:143-154。
- 吉屋松金（ゆしや・まちがに）（1999）『実践うちなあぐち教本』南謡出版。
- Antoine, Jurgita (2015) The Role of Traditional Songs in the Maintenance and Preservation of Lakota Language and Culture. IN Nicholas Ostler and Brenda W. Lintinger (eds.) The Music of Endangered Languages FEL XIX-NOLA. Pp.17-23.
- Zarasky, Suzanna (2015) Do-Re-Mi Breathes Life into Dying Languages. IN Nicholas Ostler and Brenda W. Lintinger (eds.) The Music of Endangered Languages FEL XIX-NOLA. Pp.xi-xv.

³ Zarasky によるとこのスペイン語の変種は約 500 年前から話されているようである。

